

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月日	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
I. 著書				
1. 新共同訳旧約聖書注解Ⅱ	共	1994 年 11 月	日本基督教団出版局	高橋虔、B. シュナイダー監修、石川康輔、木田献一、左近淑、野本真也、和田幹男編。樋口本人担当は、「エゼキエル書」(P. 516～576)。『新共同訳聖書』に基づいた注解書。最近の研究成果に基づいた綿密な注解書。B 5 版、総 507 ページ。
2. 聖書の思想と現代	共	1996 年 11 月	日本基督教団出版局	木田献一、荒井献監修『現代聖書講座』第 3 巻。樋口本人担当は、第 1 部旧約思想の現代性の第 1 章「創造と自然」(PP. 19～41)。内容は、1 節「旧約における創造信仰」、2 節「造られた世界」、3 節「被造物としての人間—自然との関わりにおいて」、4 節「自然の荒廃と回復」で、旧約聖書において創造と自然の理解を最近の研究に基づいて解明している。A 5 版、総 400 ページ。
3. 旧約聖書は何を語るか	単	1997 年 3 月	新教出版社	副題が「旧約思想入門」で、内容は「天地の創造」「唯一の神」「選び」「神の支配」「インマヌエル」「主の僕」「神の愛」など旧約聖書の主要な神学的テーマを扱ったテキストを取り上げ、説教の形で展開している。46 判、218 ページ。
4. 古代イスラエルの預言者の思想的世界	共	1997 年 3 月	新教出版社	金井美彦他編。樋口本人の担当は、「預言者エゼキエルの特質」(PP. 220～241)で、エゼキエルの活動が旧約の預言者の特質である啓示体験に基づいていることを論証している。A 5 版、総 340 ページ
5. 新共同訳旧約聖書略解	共	2001 年 3 月	日本基督教団出版局	木田献一監修。樋口本人の担当は、「レビ記」(PP. 134-177)と「エゼキエル書」(PP. 879-940)で、最近の旧約学の成果を取り入れて、分かりやすく注解している。A 5 版、総 1058 ページ。
6. よくわかる旧約聖書の歴史	単	2001 年 9 月 2002 年 9 月 (再版) 2011 年 4 月 (3 版)	日本基督教団出版局	内容は、第 1 章：カナン定着以前の時代、第 2 章：カナン定着時代、第 3 章：統一王国時代、第 4 章：北イスラエルの歴史、第 5 章：南ユダの歴史、第 6 章：バビロン捕囚時代、第 7 章：ペルシア時代、第 8 章：ヘレニズム時代、第 9 章：ローマ時代で、最近の研究の成果を取り入れて、旧約聖書の時代を分かりやすく展開している。46 判、総 200 ページ。
7. 預言者は何を語るか	単	2005 年 3 月	新教出版社	アモス、ホセア、イザヤ、ミカ、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤ、ゼカリヤ、ヨナの預言者のテキストについての 25 編の説教。預言者の入門的知識をも提供している。46 判、総 256 ページ。

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月日	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8. 聖書の解釈と正典——開かれた「読み」を目指して	共	2007 年 3 月	キリスト新聞社	関西学院大学キリスト教と文化研究センターの「正典と今日の課題」プロジェクトの研究会で発表したもので、樋口本人の分担は、「聖書の再解釈——聖書は『正典』か」(PP. 137-156)で、正典化の諸問題を論じている。46 判、総 170 ページ。
9. 新版 総説旧約聖書	共	2007 年 3 月	日本基督教団出版局	池田裕・大島力・樋口進・山我哲雄監修。樋口本人の分担は、「預言書序文」(PP. 284-286)、「エゼキエル書」(PP. 327-339)、「ホセア書」(PP. 340-350)で、いずれも最近の研究成果を踏まえた解説書である。A 5 版、総 570 ページ。
10. 聖典と現代社会の諸問題——聖典の現代的解釈と提言	共	2011 年 9 月	キリスト新聞社	関西学院大学キリスト教と文化研究センター編、樋口進編著。樋口本人の分担は「聖書とエコロジー」(PP. 66-92)で、旧約聖書におけるエコロジーの問題を明らかにしている。46 判、総 261 ページ。
11. 古代イスラエル預言者の特質——伝承史的・社会史的研究	単	2013 年 9 月	新教出版社	古代イスラエルにおいて多くの預言者が輩出したのは何故かという問題について、伝承史的・社会史的研究によって、考察している。A 5 版、総 294 ページ。
12. 自然の問題と聖典——人間の自然とのよりよい関係を求めて	共	2013 年 11 月	キリスト新聞社	関西学院大学キリスト教と文化研究センター編、樋口進編著。樋口本人の分担は「旧約聖書における自然災害」(PP. 9-47)で、旧約聖書において自然災害についてどのように論じられているかを考察している。46 判、総 316 ページ。
13. 最も大切なもの——若人たちへのチャペル・メッセージ	単	2014 年 12 月	新教出版社	著者が関西学院大学のチャペルで話した講話の 33 編をまとめたもの。聖書の言葉を分かりやすく解説したもの。小 B 6 版、総 216 ページ。
II. 学術論文				
1. 預言者の召命記事	単	1975 年 2 月	関西学院大学『神学研究』23 号	まず、預言者の召命記事の様式史的な問題についての研究史を検討した上で、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤの召命記事を分析し、その特徴を明らかにしている。そして、各預言者がなぜ召命記事を記したのかという目的を述べている。PP. 1~28
2. エゼキエルの召命記事——その伝承史的研究——	単	1978 年 3 月	関西学院大学『神学研究』26 号	エゼキエル書 1-3 章に記されている召命記事を伝承史的に検討し、1 章の記事と 2-3 章の記事が元来別の記事であったことを論証している。そして、これが合わされて、書の冒頭におかれたことの意図を探っている。PP. 84~108
3. 預言者の象徴行為	単	1980 年 6 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』171 号	旧約聖書における象徴行為がどういう意味をもっていたのかを、G. フォーラーの説に基づいて紹介した後、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルにおいて、どのような役割をもっていたかを検討している。結論としては、言葉を語る預言者が象徴行為を行う時、神の預言のうちに預言者が参与させられた、ということ。PP. 2~7

著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
4. エゼキエル書	単	1981 年 10 月～1982 年 9 月	日本基督教団出版局 『聖書と教会』187 号～199 号	1 年にわたって連載したエゼキエル書の注解。1 回分の執筆頁数は 6 頁。まず、エゼキエルの時代状況について説明した上で、11 のテキストについて、原語の意味、様式史、伝承史的な問題、テキスト全体の意味を論じている。合計 72 頁
5. イザヤ書 6 章 1－13 節	単	1983 年 8 月	日本基督教団出版局 『説教者のための聖書講解』44 号	まず、このテキストの原点からの私訳をなし、1-5, 6-8, 9-13 節に分けて、それぞれの主要な語の意味について、背景の歴史について、様式の特徴について述べた後、そこで明らかにされたことに基づいて、現代へのメッセージについて黙想している。PP. 53～58
6. イザヤ書 29 章 9－12 節	単	1984 年 3 月	日本基督教団出版局 『説教者のための聖書講解』46 号	まず、このテキストの原点からの私訳を行い、9-10, 11-12 節に分けて、それぞれの主要な原語の意味について、背景の歴史について述べた後に、テキスト全体の意味するところを検討し、そこで明らかにされることに基づいて現代へのメッセージについて説教黙想をしている。PP. 77～82
7. エゼキエルにおける復活思想	単	1984 年 4 月	日本基督教団出版局 『聖書と教会』217 号	まず、旧約聖書における死後についての思想を検討した上で、エゼキエル書 37 章の釈義をなし、ここに復活の表現があることを明らかにする。これは個人の復活思想ではなく、捕囚のイスラエルの民の回復であることを論じている。PP. 14～19
8. ヨナ書	単	1984 年 6 月	日本基督教団出版局 『教師の友』43 巻 6 号	まず、旧約聖書のヨナ書の内容を概観した上で、ヨナ書が何を主張しようとして書かれたかを、4 章を検討しながら明らかにしている。ヨナ書の主張は、神は異邦人の滅びを望まないということ。PP. 8～11
9. イザヤ書 48 章 1－22 節	単	1984 年 11 月	日本基督教団出版局 『説教者のための聖書講解』49 号	まず、このテキストの時代的背景を説明した後、各節における特にヘブル語の意味を明らかにしている。次に、明らかにされた意味に基づいて、説教へのテーマをいくつか考えている。PP. 29～34
10. 習俗としての宗教と言葉の宗教	単	1985 年 2 月	日本基督教団出版局 『聖書と教会』227 号	古代イスラエルにおける三大祭、すなわち「種入れぬパンの祭」「七週の祭」「仮庵の祭」が、それぞれイスラエルの救済の歴史と深く関係し、単なる習俗ではなく、救済を現在化しているということが論じられている。PP. 2～7
11. イザヤ書 61 章 1－11 節	単	1985 年 2 月	日本基督教団出版局 『説教者のための聖書講解』50 号	まず、これを記した第三イザヤの活動した時代、特に神殿の再建をめぐるの問題を述べた後、1-3, 4-9, 10-11 節に分けて、それぞれの節における語義を説明し、単元全体の意味を明らかにしている。そしてそれに基づいて、説教のテーマをいくつか考えている。PP. 59～64

著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 預言者における「共に苦しむ」	単	1986 年 2 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』239 号	旧約聖書の預言者の三重の苦しみについて考察。第一は、イスラエルの犯した罪のために苦しむ。第二は、イスラエルに預言が受け入れられずに苦しむ。第三は、罰を受けるイスラエルの罪を担って「共に苦しむ」。PP. 2～7
13. ルカによる福音書 10 章 1－16 節	単	1986 年 2 月	日本基督教団出版局『説教者のための聖書講解』54 号	このテキストの各節について、特に原語の意味を考察し、そこで明らかにされた意味に基づいて、いくつかの説教のテーマを検討している。PP. 59～64
14. 旧約における「死者」と「想起」	単	1986 年 11 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』248 号	まず、古代イスラエル人の死生観を述べた後に、死者に対する儀式について検討し、特に、「想起する」というヘブル語のザールについて考察している。この「想起する」は、古代イスラエルの祭りの特徴でもある。PP. 2～7
15. 神に召し出された人々	単	1987 年 1 月～12 月	新教出版社『福音と世界』42 巻 1 号～12 号	召命ということに焦点を当てて、聖書に出てくるモーセ、ギデオン、サムエル、サウル、エリヤ、イムラの子ミカヤ、アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、マリヤについて論じたもの。1 年間の連載で、1 回 4 頁、合計 46 頁
16. ヨブ 10 章 1－22 節	単	1987 年 2 月	日本基督教団出版局『説教者のための聖書講解』60 号	この章句を、1-7, 8-12, 13-17, 18-22 節に分けて、それぞれの区分の意味、特にヘブル語における意味を解明した後、「死を求める」「神と争う」「創造者なる神」という主題をめぐって黙想している。PP. 77～82
17. 聖餐の旧約的背景	単	1987 年 10 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』259 号	キリスト教の聖餐の起源は、新約聖書の「主の晩餐」にあると思われるが、これには旧約の重要な概念が取り入れられている。その背景となったと思われる過越祭や酬恩祭や契約について考察している。PP. 16～21
18. ヨブ記 31 章 1－40 節	単	1988 年 2 月	日本基督教団出版局『説教者のための聖書講解』62 号	ヨブ記の最終弁論といわれるこのテキストの特徴を述べた後、1-12, 13-23, 24-34, 35-37, 38-40 節に区分して、それぞれの意味するところを、特に原語の解明をもとに論じている。そしてその意味から現代に対するメッセージを探っている。
19. 旧約における食い飲み	単	1988 年 3 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』264 号	旧約聖書における「食べる」（アール）という語と「飲む」（シャール）という語の用例を調べることによって、「食い飲み」という表現が、古代イスラエルに於いてどのような意味があったかを調べている。PP. 2～7
20. 初代の教会が歩んだ道	単	1988 年 4 月～1989 年 3 月	日本基督教団出版局『信徒の友』498～509 号	使徒行伝の主要なテキストを 12 回に分けて、1 年間連載した聖書研究。1 回 4 頁。教会の誕生から、特にパウロの伝道によって、キリスト教が当時のローマの世界にいかにかまっていたかを論じている。合計 46 頁

著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
21. 十戒（後半）——あなたの隣人を愛せよ	単	1989 年 7 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』	旧約聖書の十戒の隣人に対する戒めを記した後半の第 5 戒から第 10 戒までを最近の研究の成果に基づいて検討したもの。特に原語の動詞の意味を検討して、戒め全体の意味を解明している。 PP. 14～19
22. アブラハムにおける旅	単	1989 年 7 月	同志社大学宗教部『レゴ』17 号	まずアブラハムがメソポタミアのウルからハランを経由してカナンに旅をした旅程を説明した後、その旅が「強いられる旅」であったこと、また「共にする旅」であったこと、「目的のある旅」であったことを論じている。PP. 2～7
23. 私の説教論	単	1989 年 11 月	日本基督教団出版局『説教者のための聖書講解』69 号	「説教とは」「説教者とは」という説教に関する基本的なことを述べた後に、「説教の準備」「何を語るか」「説教作りの実際」「説教の研鑽」といった実践的なことについて論じている。 PP. 4～10
24. ホセア書 9 章 1－9 節	単	1990 年 2 月	日本基督教団出版局『説教者のための聖書講解』70 号	まず、ホセア書の書かれた時代背景を論じ、ホセア書の特質を述べた後に、このテキストを 1-6, 7-9 節に分けて、各節の主要なヘブル語の意味を吟味し、単元全体の意味を探っている。そして「喜ぶな」「迫害に合う預言者」というテーマをめぐって説教への黙想をなしている。PP. 65～70
25. ミカ 6 章 1－16 節	単	1990 年 12 月	日本基督教団出版局『説教者のための聖書講解』73 号	ミカの時代背景を述べた後、1-5, 6-8, 9-16 節に分けて、各節の主要なヘブル語の意味を吟味し、単元全体の意味を明らかにし、さらに「主の御業を思い起こす」「主の喜ぶたもうもの」という説教のテーマについて考察している。PP. 53～58
26. 預言者の荒野伝承についての一考察	単	1991 年 3 月	関西学院大学『神学研究』38 号	ヘブル語の「見つけた」（マーツァー）などの語を手がかりに、預言者が荒野を理想的に見た伝承を検討している。それは特にレビ人集団など農耕文化に反対したグループのものであることを明らかにしている。PP. 83～101
27. イスラエル史	単	1991 年 7 月～1992 年 7 月	湖声社『湖畔の声』	まず「イスラエル史」についての研究史を述べた後に、族長の時代からローマ時代までのイスラエルの歴史を 12 回に分けて 1 年間連載したものである。主に M. ノートの見解に沿っている。各回 4 頁。 合計 48 頁
28. 旧約研究と情報	単	1992 年 6 月	日本基督教団出版局『聖書と教会』315 号	まず旧約研究の情報処理にコンピューターが非常に役立つことを述べている。そして、聖書などのデータベースを自分の研究にどのように利用していったらよいか、いろいろな可能性について論じている。PP. 2～7

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月日	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29. 詩編 7 4 編	単	1993 年 2 月	日本基督教団出版局 『説教者のための聖書講解』82 号	まずこの詩編の文学類型について述べた後に、1-11, 12-17, 18-23 節に分けて、それぞれの節のヘブル語の意味、単元全体の意味を明らかにし、「神よ、なぜ」「創造者なる神の力」「神への信頼」といったテーマについて黙想。PP. 23～28
30. テサロニケの信徒への手紙一 4 章 1 - 1 2 節	単	1993 年 8 月	日本基督教団出版局 『アレティア』2 号	まず各節についての意味を明らかにしている。その際、ギリシア語の意味の他、英語やドイツ語のいろいろな聖書の訳を比較検討している。そして「聖なるものとなる」「互いに愛し合う」「落ち着いた生活をする」といった説教のテーマについて検討している。PP. 55～60
31. ダニエル書 5 章 3 - 3 0 節	単	1993 年 11 月	日本基督教団出版局 『アレティア』3 号	まずこのテキストの背景を述べた後に、13-16, 17-21, 22-24, 25-28, 29-30 節に分けて、それぞれの単元の意味を明らかにしている。その上で、「傲慢の罪」「歴史の教訓に学ぶ」「真の支配者」という説教のテーマについて検討している。PP. 85～90
32. 聖書の研究とパソコン	単	1994 年 9 月	新教出版社 『福音と世界』49 巻 11 号	この雑誌の「電腦時代の教会と神学」という連載の第 1 回として執筆。まず、様変わりする聖書研究の環境を紹介した後に、最近の優れたものであるバイブル・ワークスというソフトを紹介し、それを使っていかに便利な研究ができるかを論じている。PP. 59～61
33. 新しいメディアによる牧会の可能性	単	1997 年 8 月	日本基督教団出版局 『アレティア』18 号	まず、「教会」とは何かをトゥルナイゼンの所論を手がかりに論じた後、インターネットを利用して牧会がどのようにできるかという可能性について論じている。電子メディアを使って牧会の働きをしている実際の例も紹介している。PP. 4～9
34. 言葉の洪水の中で真の言葉に生きる	単	1997 年 10 月	日本基督教団出版局 『信徒の友』612 号	まず、「高度情報化時代」にいか言葉が氾濫しているかを述べた後に、聖書の言葉がとこしえに変わらず、命を与えるものであることを論じている。PP. 14～17
35. エゼキエル書	単	1998 年 4 月	朝日新聞社 『アエラムック』37 号	「旧約聖書がわかる」という特集のエゼキエル書を担当。まずエゼキエルの時代を概観した後、エゼキエル書の構成、およびエゼキエルの思想の特徴について論じている。PP. 36～40
36. ホセアの預言者理解	単	2000 年 3 月	ウィリアムス神学館 『ヴィア・メディア』3 号	まず、前 8 世紀の預言者が自分のことをナービーと理解しなかったことを述べ、ホセア書でナービーの出る 4 つのテキストを検討して、ホセアがモーセをナービーと呼んで正典的な預言者がナービーと言われるようになったことを論証している。PP. 1～16

著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
37. 女と男の物語ーフェミニズムの聖書解釈から教えられたこと	単	2005 年 5 月	日本基督教団京都教区 『聖書はおもしろい』2 巻	創世記 2-3 章における「女と男」の理解をめぐる従来の解釈を紹介した後、原文に基づいて厳密に解釈すれば、いかに偏見に満ちたものであるかを論証している。PP. 11～14
38. 聖書における同性愛	単	2000 年 5 月	日本基督教団京都教区 『聖書はおもしろい』2 巻	創世記 19:5, 士師記 19:11, レビ記 18:22, 20:13, コリント 6:9, テモテ 1:10, ローマ 1:26-27 の同性愛を扱っているテキストを検討し、それが性的指向の同性愛を非難するものでないことを検証している。PP. 111-115
39. イザヤ書 1 1 章 1 - 1 0 節	単	2000 年 11 月	日本基督教団出版局 『アレタイア』31 号	まず、この預言の語られた時代背景を検証した後に、1-5, 6-9, 10 節の厳密な釈義を試み、その後「エッサイの根から出る若枝」「自然界の平和」「その日が来れば」といった説教のテーマについて黙想している。PP. 61-66
40. 「旧約聖書神学」の叙述について	単	2001 年 3 月	青山学院大学 『基督教論集』44 号	まず、これまでの「旧約聖書神学」の研究史を振り返り、フォン・ラート以後の旧約神学は「中心」を据えて叙述する傾向があることを検証し、シュミットとツィンマリの神学を検討している。最後に「旧約聖書神学」の適切な叙述についての私見を述べている。PP. 1-16
41. 聖書が語る復活の希望	単	2001 年 4 月	日本基督教団出版局 『信徒の友』654 号	まず、旧約聖書における死者の復活に関して言及しているテキストを検討し、バビロン捕囚の絶望状況でエゼキエルに与えられた幻に究極の希望があることを論じている。PP. 28-31
42. 新共同訳聖書 列王記上 12 章-16 章の訳文の検討	単	2002 年 10 月	日本聖書協会 『聖書翻訳研究』29 号	当該のテキストをヘブライ語の原語を綿密に検討して、新共同訳の訳文の不適切な箇所を指摘している。聖書翻訳について原文に忠実であること、解釈は入れないこと、固有名詞は原音に近いこと、代名詞語尾もできるだけ省略しないことなどが指摘されている。PP. 25-38
43. ヨナ書の世界	単	2004 年 1 月	日本基督教団出版局 『信徒の友』	ヨナ書のテキストを検討し、そこに流れている思想が、神の大いなる御業、神の深い憐れみであることを論じている。PP. 16-19
44. 預言書の正典化の諸問題	単	2006 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』7 号	旧約聖書の預言者がどのようにして正典化されていったかを伝承史的に編集史的に解明している。そこには、政治的要素もあり、従って未完であり、絶えず再解釈が必要であることを主張している。PP. 1-23
45. ホセア書における伝承	単	2007 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』8 号	ホセア書に取り入れている伝承がどのような者であるかを述べた後、その伝承に係譜と担い手を解明し、ホセアの預言の特徴を解明している。PP. 1-22
46. アモスの預言者意識	単	2008 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』9 号	アモスが自分の職務をどう理解していたかを、特に召命の記事を検討することによって、解明している。PP. 1-17

47. イザヤの召命記事	単	2009 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』10 号	イザヤの召命記事の伝承史を検討することを通して、カナン人の支配者層に虐げられていた貧しい人たちを擁護するために、書かれたことを明らかにしている。PP. 1-21
48. 〈旧約聖書〉注解書シリーズから	単	2009 年 5 月	日本基督教団出版局編『説教者のための聖書注解ガイド』	説教者のための役に立つ注解書を紹介するもので、Altes Testament Deutsch (ATD)、Old Testament Library (OTL)、Biblischer Kommentar (BK)、Herders Kommentar などの特徴を解説している。PP. 12-17
49. 預言者の社会的告発——社会史的考察	単	2010 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』11 号	預言者の社会史的状况を考察した上で、預言者がどのような社会的告発を行ったのか、そこにはどんな問題が含まれていたのか、を明らかにし、預言者が当時のどのような社会層と関係があったのかを明らかにしている。PP. 1-22
50. エレミヤの初期預言における伝承	単	2011 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』12 号	エレミヤがその初期預言においてどのような伝承を用いたかを明らかにし、その伝承を担ったグループがどのような者であり、エレミヤとどのような関係にあったかを明らかにしている。PP. 1-20
51. Eine Untersuchung zur Wüste nüberlieferung der Propheten	単	2011 年 11 月	Kwansei Gakuin University Humanities Review, Vol. 16	ヘブライ語の「見つけた」(マーツァー)などの語を手がかりに、預言者が荒野を理想的に見た伝承を検討している。それは特にレビ人集団など農耕文化に反対したグループのものであることを明らかにしている。PP. 1-13
52. 原初史における人間理解とエコロジーの問題	単	2012 年 3 月	『Sower』39 号 (日本聖書協会)	創世記の天地創造の物語における人間と自然との関係をエコロジーの観点から考察したもの。特に、「自然を支配せよ」をめぐるの解釈の問題点を探っている。PP. 8-9
53. 古代イスラエルの初期預言者について	単	2012 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』13 号	初期預言者の活動の背後に、王国成立前のイスラエル部族連合のヤハウエ主義のグループの承認と支持があったことを明らかにしている。PP. 1-21
54. 預言者研究の動向と課題	単	2012 年 7 月	『ヴィア・メディア』7 号 (ウイリアムス神学館)	19 世紀のエーヴァルト以来の預言者研究の歴史をたどり、それぞれにどのような傾向があったかを明らかにしている。PP. 1-21
55. 第二イザヤの預言者像	単	2013 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』14 号	第二イザヤは、捕囚前の「ヤハウエのみ運動」を展開したヤハウエ主義者の伝承を受け継ぎ、究極のヤハウエ主義(唯一神信仰)を確立した者であることを明らかにしている。PP. 1-20
56. 預言者研究のパラダイムシフトと課題	単	2013 年 10 月	『旧約学研究』10 号 (日本旧約学会)	旧約学会のシンポジウムにおける発題をまとめたもの。預言者研究の研究史を批判的にたどり、どのような問題があったかを記し、現代に於ける課題を提起したもの。PP. 143-154
57. 旧約聖書における自然災害	単	2013 年 11 月	関西学院大学キリスト教と文化研究センター編『自然の問題と聖典——人間の自然とのよりよい関係を求めて』キリスト新聞社	旧約聖書において、自然災害がどのようにに叙述されているかを述べている。また、自然災害に遭った人々の反応、預言者における記述の特徴、終末論における記述などについて論じている。pp. 9-47

58. 旧約預言者の特質	単	2014 年 3 月	『関西学院大学キリスト教と文化研究』第 15 号	旧約聖書には多くの預言者が登場するが、彼らの特質が何であったかを、初期預言者と古典的預言者に分けて論じている。pp. 5-26
59. エゼキエル書を学ぶ	単	2016 年 5 月	『聖書セミナー講義録』第 6 号、神戸バイブルハウス	エゼキエル書がどういう書物かを、召命、歴史理解、裁きの預言、希望の預言について論じたもの。pp. 7-50
60. 生きる意味	単	2017 年 5 月	同志社大学キリスト教文化センター編『チャペルアワー奨励集』NO.295	同志社大学のチャペルアワーで話したもの。生きる意味を考える大切さを述べたもの。pp. 83-91
61. 新しい聖書翻訳の課題と展望	単	2017 年 6 月	『聖書事業懇談会講演録』1 号	日本聖書協会の新しい翻訳について解説したもの。pp. 43-52
62. 夙川学院の教育理念について	単	2018 年 3 月	『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第 12 号	夙川学院の教育理念を歴史的にどう変遷したかを検証したもの。pp.3-11
63. 旧約聖書における“平和”思想	単	2018 年 3 月	『夙川学院短期大学研究紀要』第 45 号	旧約聖書において「平和」がどのように語られているかの検証。pp.3-15
64. 聖書における『愛』と『誠実』	単	2019 年 3 月	『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』第 13 号	短大の教育理念である「愛と誠実」が聖書においてどのように語られているかの検証。pp.3-8
65. 旧約における『食べて飲む』の表現について	単	2019 年 5 月	『New 聖書翻訳』第 5 号	旧約聖書において、「食べて飲む」という表現がどういう意味であるかの検証。pp. 46-56

著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
Ⅲ. その他 <翻訳> 1. エゼキエル書	単	1980 年 4 月	新教出版社	英語圏で定評のある The Cambridge Bible Commentary on the New English Bible の 1 冊、K. W. Carley, The Book of Prophet Ezekiel の翻訳。エゼキエル書についての詳細な概論の後、8 つに区分された各部分の解釈が記され、最後にエゼキエル書のメッセージが記されている。歴史年表や図版もついている。46 判、総 300 ページ。
2. イスラエル史	単	1983 年 7 月 2002 年 9 月 (3 版)	日本基督教団出版局	欧米においてイスラエル史の基本的資料とされている Martin Noth, Geschichte Isarels, 8 Aufl. の翻訳。まずイスラエルとは何か、ということの詳細に論じた後、文献学に基づいて、イスラエルのパレスチナ定着の時代からローマ時代に至る歴史を詳細に論じている。「訳者あとがき」にかなり詳しい解説が施されている。A 6 版、総 690 ページ。
3. レビ記	単	1983 年 8 月	新教出版社	The Cambridge Bible Commentary on the New English Bible の 1 冊。J. R. Porter, Leviticus の翻訳。まずレビ記についての詳細な概論の後、5 つの区分に分けられたそれぞれについて、語句の意味や章句全体の意味が詳細に解説されている。46 判、総 213 ページ。
4. 旧約聖書と伝承史	単	1986 年 11 月	教文館	W. E. Rast, Tradition History and the Old Testament の翻訳。旧約研究の代表的な方法の一つ、伝承史について、まずその研究の歴史を詳細に論じた後に、この方法の特徴を解説し、さらに旧約のヤコブ伝承と第二イザヤのテキストをこの方法で分析している。B 6 版、総 158 ページ。
5. イザヤ書 I	単	1987 年 11 月	新教出版社	R S V に基づいてスコットランドから出されている旧約聖書注解書シリーズ The Daily Study Bible の 1 冊 J. F. A. Sawyer, Isaiah I の翻訳。まずイザヤ書についての詳しい序論があり、その後 66 の単元に分けられたそれぞれの章句についての解説がなされている。46 判、総 519 ページ。
6. イザヤ書 II	単	1995 年 2 月	新教出版社	R S V に基づいてスコットランドから出されている旧約聖書注解書シリーズ The Daily Study Bible の 1 冊 J. F. A. Sawyer, Isaiah II の翻訳。「第二イザヤ」「第三イザヤ」の部分を 47 の単元に分け、それぞれをヘブル語の意味を中心にして、適切に解説されている。46 判、総 343 ページ。

著書，学術論文等の名称	単著，共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 旧約預言の歴史	単	1997 年 7 月	教文館	Joseph Blenkinsopp, A History of Prophecy in Israel の翻訳。これは「カナン定着からヘレニズム時代まで」という副題が付けられており、旧約のすべての預言者が扱われている。全体は六つの章に分けられ、それぞれの時代において個々の預言者がどのような活動をしたかの特徴を明確にしている。「訳者あとがき」にかなり詳しい解説が施されている。A5 版、総 373 ページ。
8. 旧約聖書神学要綱	単	2000 年 9 月	日本基督教団出版局	Walther Zimmerli, Grundriss der alttestamentlichen Theologie, 6 Aufl. の翻訳。全体は、五章二三節からなっている。第一章「基礎的な事柄」、第二章「ヤハウエの賜物」、第三章「ヤハウエの戒め」、第四章「神の前における生」、第五章「危機と希望」という構成で、「神の名の啓示」を中心に据え、神の特質、神と人間との関係、人間の救済について論じられている。「訳者あとがき」にかなり詳しい解説が施されている。A3 版、総 420 ページ。
9. よくわかるイスラエル史	単	2003 年 3 月	教文館	Siegfried Herrmann und Walther Klaiber, Die Geschichte Israels の翻訳。これは「アブラハムからバル・コクバまで」という副題が付いており、古代イスラエルの全歴史が扱われている。ヘルマンによる第一部は 11 の章に分けてペルシア時代までが詳細に論じられている。クライバーによる第二部は、12 の章に分けて第二次ユダヤ戦争までが詳細に扱われている。46 判、総 203 ページ。
〈辞書〉				
1. キリスト教人名辞典	共	1986 年 2 月	日本基督教団出版局	アブラハム、モーセ、サムエル、ダビデ、ソロモン、エリヤ、アモス、ホセア、イザヤ、ミカ、エレミヤ、エゼキエル、ネブカデネザル、ゼルバベルなど、旧約聖書に出てくる人物 222 人についての解説。
2. 旧約・新約聖書大事典	共	1989 年 6 月	教文館	ドイツの Biblisch-historisches Handwörterbuch の翻訳と加筆。旧約聖書に出てくる人物や事柄についての解説で、城、メギド、エゼキエル、ギベオン、ゲバル、テルアビブ、会衆、集会、ミヅパの 9 項目を担当。
3. 新共同訳聖書事典	共	2004 年 3 月	日本基督教団出版局	中野実と共に編集の任を負った。『新共同訳聖書』に出る人物や事柄についての解説で、アブラハム、安息日、契約の書、言葉、戦車、天使、部族、ヘブライ語、預言者など 92 項目を担当。
4. 聖書学用語辞典	共	2008 年 3 月	日本基督教団出版局	中野実と共に監修の任を負った。伝承史、神聖法集、預言と預言者、選民思想、創造信仰、象徴行為等の項目を執筆。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月日	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. キリスト教平和学事典	共	2009年9月	教文館	関西学院大学キリスト教と文化研究センターの編集で、栗林輝夫と共に監修の任を負った。一神教、契約、罪、終末論、神義論等の項目を執筆。
〈学会発表〉				
1. エゼキエルの召命記事の形成について	単	1977年11月	日本旧約学会	エゼキエル書1－3章の召命記事が伝承史的にどのようにして形成されたかを解明している。2－3章は、初期の召命体験に基づいた記事であり、1章は最も後期のものであって、最終的にエゼキエルが両者を一つにした。
2. 預言者の荒野伝承についての一考察－いわゆる Fundtradition について	単	1981年3月	日本基督教学会 近畿支部会	「見つけた」（マツァー）や「知った」（ヤーダー）や「そばを通った」（アールバル）という動詞を手がかりに、バアル礼拝と戦った預言者たちに伝えられていた Fundtradition を伝承史的に解明したもの。
3. ホセアの預言者理解について	単	1986年3月	日本基督教学会 近畿支部会	ホセア書において「預言者」について述べられている4カ所のテキストを検討し、ナービーという語をホセアが初めて正典的預言者の用語として使ったことを検証した。
4. 新共同訳聖書「列王記上12章-16章」の訳文の検討	単	2001年10月	日本聖書翻訳研究会	当該のテキストをヘブライ語の原語を綿密に検討して、新共同訳の訳文の不適切な箇所を指摘。聖書翻訳について原文に忠実であること、解釈は入れないこと、固有名詞は原音に近いこと、代名詞語尾もできるだけ省略しないことなどを述べた。
5. 預言者研究のパラダイムシフトと課題	単	2012年11月	日本旧約学会	「欧米の旧約学の総括と展望」というテーマで行われたシンポジウムにおける発題。預言者研究の変遷を述べ、課題を指摘した。特に、預言者とは何かという探求を社会史的視点から解明する必要性を指摘した。